

「2023年度中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学教育学部2年 中野 花菜

私がこのプログラムに応募した主な動機は、

- A. 将来は子どもの本に関わる仕事がしたいと思っており、日本で目にすることが少ない中国の児童文学について知りたい
- B. アイルランドでの交換留学中、日本との文化差などを考える機会が多かったが、間をおかず中国に留学することで西洋 vs 日本にとどまらない新たな角度の視点を得たい
- C. 交換留学中に中国人に中国人だと思われることがあったが英語でしか返せないのが悔しかったためのおもに3点だった。

まず主にC.の語学面について。語学プログラムとしての本プログラムの魅力は、短期プログラムのメンバーで固まって授業を受けるのではなく、長期で来ている各国の語学留学生に混ざって授業が受けられることだ。

漢字圏ではない国の留学生と一緒に中国語を学ぶと、視覚ではなく音やリズムから中国語を覚えていったり、漢字の使い分けや読みの違いを部首や旁から判断したりと、インプットのしかたの違いを知り、とても新鮮だった。また、英語以外に中国語がリンク・ランゲージとして機能する場面に初めて身を置けたことはとてもよかった。クラスメイトたちは、母語の次に話しやすい言葉は英語でも、中国語学習者どうし中国語を使って会話し、どうしても伝わらない部分だけ英単語で補うという方法でコミュニケーションをとっていた。私は英語が好きなので、今まで、自分は母語の異なる人ともあまり臆さずに話せる、と、ある意味いい気になっていた。しかし今回の留学で「周りの人たちより圧倒的に言語能力が低くて話せない」という環境に置かれ、しばらくの間とても引け目に感じ、クラスメイトが話しかけてくれても積極的につながろうとすることができなかった。しかし、クラスメイトたちは、私が話しやすいトピックを探して質問してくれるなど、私が輪に入っていけるようにしてくれた。プログラムの授業がすべて終了した金曜の晩と翌日の休日は、彼女たちとずっと一緒に過ごした。少ない手持ちの語彙と文型をせいっぱい使ってコミュニケーションをとろうとするうちに、中国語を使うことへのハードルが大きく下がった。また、彼女たちからたくさんのあたたかさや優しさ、明るさを受け取り、私にとって彼女たちはとても大切な人になった。言語的に多くの情報を伝え合えなくても、こうやって心は繋がれる、ということを学べた。

次に、B.の、異文化についてのより多角的な視点を得るという目的に関して。浙江大学が用意してくれた文化理解のプログラムに加えて、自分で街や風景地区を歩く時間がたくさんあり、日本の文化や交換留学中に感じたことと比較することができ様々な気づきがあった。例えば、使い捨てプラスチックに関する文化の違いである。アイルランドでは日本に比べて包装やカトラリー等で使い捨てプラスチック製品が基本的に避けられ、代わりに紙製品がよく使われていたように感じたが、中国ではプラスチックが主流だった。しかし地下鉄の公益広告やゴミ回収場では環境保護やゴミの分別を呼びかけるものがよく目についた。また、店などで食べ物を少し残して帰るのが中国の文化だと日本で聞いていて、実際、食べ切れる量かどうかをあまり気にせずオーダーする雰囲気を感じたが、街なかや店には「食べ物を残さない・大切に使う」ということを呼びかけるポスターがそこかしこにあった。環境保護やゴミ問題に関して、政策面での変化が、人々の実際の意識・行動や商店レベルでの取り組みなどにどのくらい影響を及ぼしているのか知りたいと思った。また、洗濯物の干し方にも文化差を感じた。アイルランドでは洗濯物を人目につくところに干すと景観を損ねるという考え方から、集合住宅などではベランダに洗濯物を干すことを禁じているところもあり、私は洗濯物はできるだけ日光に当てて干そうとするものだと思っていたので驚いていた。いっぽう中国では大通りや商店街に面する窓の上下にスペースを余すことなく洗濯物が下がっていて、日本以上に洗濯物をできるだけ日光に当てようとしている感じを受けた。地下鉄内で流れている動画では家族の絆の大切さをプロモーションするために、家族の誰かに宛てたメッセージ（公募したもの？）が放映されていたり、他にも人々の意識にはたらきかけるような公益広告がたく

さんあったのは中国特有の光景だった。

また、プログラムの一環で、良渚遺跡のあるエリアに 21 世紀に入ってデザイン・開発された多機能コミュニティ（良渚文化村）を訪れた。中国ではとにかく高層マンションをどんどん建てているというイメージばかりもっていたので、アートの拠点、観光、住生活、商業、研究拠点など複合的な機能のある未来志向のエリア開発が目指されていることを知ってとても興味深く感じた。私はコミュニティづくり、場づくりに興味があったので、中国でこれからどのようなカルチャーエリアやコミュニティがつくられていくのか更に知りたいと思った。

浙江大学のあった杭州市は京都と同じで古都であり観光都市であるが、その魅せ方にも違いがあるように感じた。というのは、杭州では陽が落ちても観光が続けられる、むしろ陽が暮れかかってから風景の美しさが増すように感じたのだ。私は日本では夜の闇は怖いというイメージをもっていたが、杭州で過ごしていて陽が暮れたあとの景色を見逃したくないと感じるようになったのが不思議だった。

A.の中国の児童文学について知りたいという目的については、このプログラムは自由度が高かったため、自分で児童書専門店や書店に行く機会もつくれて嬉しかった。驚いたのは中国の書店で日本の本がとてもたくさん売られていたことだ。フェミニズム本コーナーでは日本の本が大半を占めていて、児童文学でも大人向けの小説でも日本の作者名を予想以上によく見た。日本のアニメや漫画が読まれているというイメージはあったが、こんなに様々なジャンルの日本の本が中国で読まれていることに驚いた。また、中国の児童文学のブックデザインや絵本の絵に西洋や日本とはまた違った美しさ・魅力を感じた。漢詩や故事成語、歴史上の思想家などを題材にした絵本や児童書が多いのも中国ならではの面白かった。改めて、日本で中国の児童書がもっと身近になって欲しいと感じたし、自分がそのために貢献したいと思った。

街の麺料理屋で同じテーブルに偶然座ったドイツからの旅人に、「将来は海外に住みたいと思う？」と尋ねられた。私は、わからない、と答えた。新しいことを見たり聞いたり、人に会ったりするのは面白いし、好きだと思います。でも、それは日本にすぐに帰れると分かっているときだけかも。海外に住むのに自分がそんなに向いているとはまだ思えなくて。すると彼は「Who knows?」と肩をすくめた。「ちょっと住んでみて、また戻って、今度はちがう場所に数週間とか数ヶ月、それでまた帰りたいければ帰るか、別の場所に移って...というでも良いかもしれませんよ」。そんなカッコいいライフスタイルが自分に合っているのかはまだ分からないが、少なくとも今回の留学で、また中国に行きたいと思ったし、別の国にも行って見て、そこにはアイルランドとも中国ともちがった当たり前や美しさやリズムがあって、その中で生きているひとたちがいて、その様子を肌で感じてみたいな、と思っている。